

書評

書評『日本手話とろう文化ーろう者はストレンジャー』

著者：木村 晴美

出版社：生活書院

出版年：2007年

頁数：291

ISBN 978-4-903690-07-0

評者：近藤 正臣（大東文化大学）

はじめに

高度な知見と強い信念に裏付けられた、手話と手話通訳の入門書である。通訳の種類を挙げるとすれば、逐次通訳・同時通訳という前に、通訳には音声通訳と手話通訳がある。「ではその手話とは？ 手話通訳とは？」と思う向きにはまさに最適の本だと思う。広く通訳全般に関心をもっている人に薦めたい。

著者の木村さんはろうの両親から生まれ育ったろう者で、国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科「教官」をしている（この学院の先生は教授・助教授などと教育職とはされていないため、たとえば海外での学会出席などに制約がある）。一橋大学大学院言語社会研究科修士課程修了。

著者は1995年に「ろう文化宣言——言語的少数者としてのろう者」（『現代思想』）という論文（市田泰弘氏との共著）を発表して、かなり大きな反響を呼んだことがある。当然、多くの批判もあったのに対して、講演やろう学（deaf studies）を進めるほか、大学院入学を機に、メルマガ「ろう者の言語・文化・教育を考える」を発行し始めた（2004年）。このメルマガの記事を5つのジャンルに分けて再構成したのが本書である。（現在も「まぐまぐ！」で継続発信中である。以下 URL を参照。）<<http://www.mag2.com/m/0000255806.html>>

本書の内容

メルマガの記事をまとめた5ジャンルがそのまま目次になっているから、まずこれを列挙しよう。

1. 日本手話——ろう者の言語
2. 日本手話と日本語対応手話、日本語——まったく異なる言語
3. ろう者の文化、聴者の文化——異文化を生きる
4. 放っておけない——聴者の誤解・偏見・おせっかい
5. ろうの子どもたちと日本手話——バイリンガル・バイカルチュラルろう教育をめざして

PART 1

まず「PART 1. 日本手話——ろう者の言語」はいわば全体の展望を与えようとしている入

門編・総集編である。いわば「おいしい話」が最初から出てくるので、多少は断片的な感じを与えるが、そのなかからいくつかを紹介しよう。

日本手話は言語化する言語で、音声日本語は察しの言語だという。つまり、日本手話と比べても、音声日本語は「察しの言語」なのだ。日本手話のことをなんとなく、おそらく精密には表現できない言語なのだろうと思っていると、これはまったくの誤りで、手話の方があいまいさ、ずさんな表現を許さないともいう。同様に、「しばらく電車は参りません」などという表現もゆるさない。「何分くらい」とちゃんと言わなくてはならない(16-18、137-141ページ)。

手話通訳のできるのは聴者で日本手話を学習によって習得した人なのだから、手話通訳者がこの手話の特徴をよく理解しないと気まずい思いを双方がすることになる。日本手話で言うことをすべて音声日本語で言ってしまうと、いかにも押しつけがましく聞こえ、逆に、音声日本語ではここで止めておくということところで日本手話でも止めてしまうと、「それでなに？」ということになる。音声日本語では「...先ほどの書類の差し替えの件だけど、差し替えるのは...」で止めて、「わたしがする？ 係長がする？」という部分は言わないが、日本手話では、そこで止まってしまうと「それで、それをどうするの？」となるという。ただし、日本手話でもストレートな言い方しかないわけではなくて、遠慮した言い方もあることを手話学習者は学ばなくてはならないという。

ろう者は「イエス・ノー」を問う疑問文についてはまずイエスかノーだけを答える。ところが聴者はこれだけを答えられると、その質問に対して不快感をもったり答えたくないのだろうと考えてしまう。こうした場合は、手話通訳者がろう者に先を答えるよう、促すことが必要になる。そのような文化の仲介役もしないと気まずい思いを残してしまう。

語彙の構造が言語によって違うのは意味論の常識であるが、ASL (American sign Language = アメリカ手話) とのずれもおもしろい。英語の sister は「姉」と「妹」の両方を指すが、ASL ではガソリンと食用の油を分ける。これに対して日本手話ではこれを1語で表すという。付きあっている相手から「一緒になりたい」というのがプロポーズのことだと聴いて、あるろう者は「ピンとこないねえ...。何を一緒に？ と言ってしまいそう。どうして聴者はこれがプロポーズってわかるのかしら」と(32ページ)。「相手の言語を正しく理解するためには、まず、自分の言語の語彙体系の束縛から脱する」ことが必要ではないか(26ページ)と、著者は論じる。音声日本語と日本手話の意味分野のずれについては、PART 2、PART 5でもさらに例があげられる。

手話にいう<わるくない>は日本語の「わるくない」と違うという。たとえば、「Aさんは料理が上手という評判である。Aさん宅で出された料理の品々を口にして<わるくない>」というふうに手話ではいう。「どちらかといえばプラス評価に使われている」(29ページ)のに対して、音声日本語では「悪くない」は「それほどでもない」という意味だと解釈されると見てよい。

実は音声英語で“Not bad” は「悪いわけではない——それほどよくはない」という意味になるとは限らない。評者が最初にアメリカに留学した折にお世話になった家庭のお父さんがさかんにこれを使った。実は、「うん、とてもおいしいぞ」という意味なのだ。少なくとも彼

の場合にはそうであった。その後、「そこそこだ」という意味でもアメリカで使われることが分かった。最近読んでいる小説に次のような1節があった——David asked, “Not bad?” Miles nodded. Not bad. In fact, tonight it all seemed better than “not bad.” (Russo, R., 2002, *Empire Falls* (Vintage Books), p. 102) —— (「(スパゲッティを2度茹でしたのについて) 悪くない?」と聞かれ、「ああ、<悪くない>よ」と答えてはみたが、「いやそれどころか、今日は、<悪くない>よりもっとうまいと思えた」)。David は「うまい」の意味で使い、Miles もいったんはそのまま返したのだが、考えなおした時には「そこそこだ」の意味になっていて、前言を訂正している。

手話では、顔の表情を使って文法上の機能を表し、これを NMS (非手指動作) と呼ぶ(後述)。手話を話すときにはただ一般的に「表情を豊かに」するのではない。このほかにも、たとえば、ある行為が「問題ない」ということを表すのに、NMS で口を尖らせる。しかし、聴者で手話を学んでいる人はこの表情を音声日本語での表情と混同して、「不満だけど仕方がない」と受け取ると、誤解が生じる。「問題ない」と表出しているのに、いつまでも謝り続けるということになる (34~36 ページ)。

音声通訳でも電話通訳は難しい。まったく事情を知らないままに、相手の表情を見られずに電話で通訳をすることは危険でさえある。手話でも、「電話通訳は難しい」という (40~42 ページ)。ろう者間で直接に電話をすることはないので、手話通訳者を通して話すことになる。ここでは、相手が名前を聞いてくるとき、手話通訳者が自分の名前を答えてしまうことがあるという、いわば初歩的な間違いの話が紹介されている。新米の研修生は著者に電話の通訳を頼まれることを嫌うらしい。それでも著者はまた今日も、「電話、頼むよ」とやる。

ただ、これは音声通訳でも起こりうることで、プロの通訳者は、英語で YOU と言われれば、自分のこととは考えない。通訳をその人のためにしている日本人のこととする。’I want to go Akihabara this afternoon.’ と通訳すれば、この I はもちろん日本人クライアントのことだ。「お名前は?」と英語で問われて自分のことなのかクライアントのことなのかが不明なら、たとえば、’This interpreter is speaking on behalf of Mr. Tanaka.’ などとするだろう。

PART 2

続いて、「PART 2. 日本手話と日本語対応手話、日本語——まったく異なる言語」では本格的な日本手話の話になる。

まず、日本手話はそもそも音声日本語とは異なる、まったく別の言語であることが強調される。日本手話はろう者の母語である。この両者は文法構造が違ふし、個々の単語は対応するものがあるものの、語彙の構造が違ふ。この PART には、単語の意味分野のずれから誤解が生じるケースがいくつ挙げられていて、おもしろい。たとえば、「かまわない」とか「必要ない」、「好き」、「すみません」などだ。「すみません」については、手話から見るとなんと8つの機能があるというような知見が得られる (その8つの機能がなんであるかは、ちょっと分かりにくい)。さらに、「寒くない?」と問われた聴者が手話で「平気」と答えるのだが、この「平気」という単語は手話では英語の cool (冷静な、落ち着いた) に近くなってきている。日本語では「平気」と言っても、この「平気」は「かまわない、無頓着な、無関心な」

という意味で使えるから、「寒くない？」に対してこれで答えになるが、手話では別の単語を（非手指副詞をともなって）使わなくてはならない（243-244 ページ）。

それに対して、シムコムと呼ばれる日本語対应手話がある。これで一挙に事態は複雑になる。シムコムとは、sim-com のことで、simultaneous communication から来ている。つまり、音声日本語を話しながら、同時に手話の単語を用いる方法で、手話のわからない聴者にも伝達ができるようになっている。これだと、この日本語対应手話を話しながら同時に音声日本語を声をだしながら話すことができる。しかしこれは、ろう者の言語である日本手話とは構造が異なる。だからろう者の母語である日本手話で同時に音声日本語を話すことはできない。いわば、英語をタイプで打ちながら声を出してその意味を日本語でしゃべるようなものだろうか。してみたことはないが、かなりの高等技術になるろう。

この日本語対应手話と、ろう者の母語である日本手話との違いは何か。これはそう簡単には説明できないようなのだが、私の読んだ限りでは、語順も違うと同時に、NMS (non-manual signal) の頭文字で非手指動作のこと。最近では non-manuals = NM とか non-manual component と呼ばれているという) があって、しかもこれで否定や目的語を示す文法事項はで示されるという。「でない」とか「しかし」、「それで」などに当たる部分が顔の表情で示される。だから、これを見逃してしまうと、否定と肯定が逆になったり、いわば主語と目的語の混乱が生じる。顔の表情がこうした文法事項を表すのだから、日本手話を「話す」人は当然、表情が豊かになる。対应手話を使う人は MNS を入れないので、無表情になり、日本手話だけを理解できる人は、NMS を理解できなかつたり誤解したりすることになる。

さらに厄介なのは、手話通訳にかかわる聴者の人たち、あるいはろう者のことを心配する善意の聴者の間では、この対应手話の方が圧倒的に優勢で、どうも、日本手話を母語としている人たちの間でさえ、これを認めるような雰囲気があるということだ。NHK の手話講座でもこのシムコムを教えていた。若いころにこの番組の助手を務めたこともある著者が、久しぶりに帰省すると、両親のおしゃべり仲間から、仕事で日本語対应手話を使うようになったのに対して「さすが東京の手話になったねえ」と褒めてもらえることになる。ただし著者はこれを喜ぶどころか、アレルギー反応を示し、これがきっかけで「シムコムはもう使うまい」と決心することになる。これほど大きな問題なのである。これはさらに PART 5 の中心テーマになる。

PART 3

さらに「PART 3. ろう者の文化、聴者の文化——異文化を生きる」では、ろう文化と聴文化の間にはいくつかの微妙な違いがあることが明らかにされる。たとえば、ろう文化では時間のことをきちっと言う。「ちょっと」とか「しばらく」、「見合わせている」では通らない。もちろん、時間の観念は聴者の文化でも国によってずいぶんと異なることはつとに知られている。Edward Hall が「(時間や場所の言語という) 沈黙の言語が雄弁に語る」と喝破したとおりである。

また、ろうの文化では「太ったんじゃない」ということを平気でいう。アメリカのろう者の間では、「まあ、太ったわねえ」というのが親愛の情を表したあいさつだと聞いたことがあ

る。ただし、いつもこうではないというから注意が必要だ。さらに、ろう文化ではドアは開けておくという。そしてノックは不要である（しても意味がない）。ただ、だからといって、中にいる人に無断でズカズカ入っていくのはだめだともいう。著者の教える学院でも、研修生が初めは戸惑う。これを「カルチャーショックです」と言う学生もいる。さらに、同じろう文化とでも関東と関西とのちがいがあるといふからおもしろい。

この部分の最後に、ろう者が聴者をうまく利用して「痛快になる」小噺が紹介されている。また、手話コーラス、手話ソングは受けつけないが、手話カラオケの楽しみ方はあるという。そして最後には、ろう者と聴者の俳優が共演するアメリカのミュージカルの話がある。

PART 4

続いて「PART 4. 放っておけない——聴者の誤解・偏見・おせっかい」では聴者のろう者に対する独りよがりな態度がいろいろと示される。

聴者の誤解・偏見・おせっかいはいっぱいあるようだ。たとえば、「チンパンジーにも手話が話せる」という新聞記事がでて、著者は怒る（実はこれは意味をもつジェスチャーではあるが、言語ではない）。また、ろう者の使う手話が「ヘンだ」といって修正をもとめてくる聴者がいる。一部の手話講習会では、ろう者がふつうに使っている「自動販売機」（たった1語で表現される）を教えず、逆にろう者が使いもしない単語を教えているところがあるという。

ろう者にとっては日本語は第2言語であるから、読み方を間違えることもある。これはわれわれが英語のアクセントを間違えるのとまったく同じことである。もちろん、音声日本語の中で文字を読んで暮らしているから、2言語習得を宿命づけられていて、書かれた日本は理解できる。なのに、読み方（マウジングで示せる）を間違えただけで「やはりろう者はだめね」となる。しかしろう者は表意文字としての漢字は小さい時から見ているので、漢字は好きだという。NHK手話ニュースでは字幕に出る漢字にすべてルビがふってあるが、ろう者はこれをあまりみない。

筆談のとき、「漢字、わかりますか」と聞かれる。当たり前というより、漢字は得意である。ひらがなだけで書いてくる人がいるが、かえって分かりにくい。もちろん、ろう者の日本語を読む能力は一樣ではないが、漢字混じりの文のほうが読みやすいという。熟語の意味を聴かれて、その読みを教えても意味はない。

また、「腕を組む」というしぐさが聴者とろう者ではまったく違った意味を持つことから、誤解が生まれる。ろう者の間では、これは相手の言うことを真剣に聞こうとしている（自分からは口を挟まずに）、相手の言うことをとことん聞いてあげるといふ含意をもつようだ。聴者の間ではなんとなく「生意気」そうな恰好に見える。

聴者が不便を感じ、ろう者にはまったく不便でないこともいっぱいある。たとえば、風邪で喉をいためて声が出なくても、講義も講演もできる。パーティのとき、やかましい中でも遠くの人と対話を交わせる。電車のドアが閉まってからでも、ふつうに話せる。

ろう者は宿泊拒否にもあっている。また、悪意ではなくても、手話をしぐさを語源としてそこから発達したとし、ジェスチャー、手振り、身振り概念でとらえる捉え方がとんだとこ

ろで頭をもたげる。

PART 5

最後の「PART 5. ろうの子どもたちと日本手話——バイリンガル・バイカルチュラルろう教育をめざして」は、実はもっとも迫力がある部分で、著者のもっとも言いたいことのように読める。ろうの子供たちの教育についての問題である。

日本には聾学校が国立1校、公立97校、私立1校があり、戦後は学校教育法で小・中学段階は義務とされている。それではここでの授業は日本手話で行われているか、あるいはシムコムで行われているか。日本手話がろう者の母語だということならば、基本的な教育は日本手話で行い、同時に、日本語（書記日本語と呼んでよいもの）理解できるようになるためにこれを第2言語として教えればいいのかという考えは、納得できる。聴者の場合とのアナロジーを考えれば、算数や地理、歴史などは母語の音声日本語で学んでいるし、第2言語として英語を学んでいる。実はこれが著者の主張である。しかし現実はどうかという、それほど簡単ではないようだ。

実は、日本手話による教育を望む子供への対応は70年もの長い間放棄されてきた（251ページ）。現在のろう学校は「聞く、話す」ということに主眼をおいた「聴覚口語法」を教えている。ろう者は聴者が話しているのをふつうに理解し、自分も音声日本語が「話せる」ほうがいいという考えである。これが70年間、続いている。平成9年の調査では、「手話を一切使っていないろう学校が小学部では半分以上、幼稚部で7割以上」である（255ページ）。ろう学校教員養成課程で手話が必修科目になっていない（255ページ）から、ろうの子どもの手話が読めないし、もちろんこの手話で教えるということはない。こうしたことは、第159回国会に「共生社会に関する調査」報告で明らかにされたことである。また、1校だけある国立のろう学校でも、そのホームページを見ると手話にはいっさい触れられていない（257ページ）。著者の両親も、「ろう学校の先生から、『手話で話すとは日本語をおぼえられなくなりますから、子どものいる前では、できるだけ手話を使わないようにしてください』と指導されていた」（263ページ）。著者の家庭ではそうはならなかったようだが、「手話はよくないもの」というイメージを著者やその両親に植え付けることにはなった。

したがって著者自身も、「私だって20代前半まで『手話ってできそくないの言葉だと思っていた』（66ページ）と述懐するような事態が生まれた。著者が、手話を学問的探求の対象となる言語の一つであることに気づき、「ろう」であることや、ろうである両親、手話に対する見方が劇的に変わったのは「20代の初めに渡米した時」（262ページ）なのだ。

デフフリースクール龍の子学園では日本手話を使って教育が行われていて、ここに通っているろう児たちは「自分たちの言葉である手話で話すことに自信を持っている」、そしてこれを「正直言って、とてもうらやましい」と思っている（264ページ）。

最後にCODAおよびKODAについて触れられている。CODAはChildren of Deaf Adults、KODAはKids of Deaf Adultsの略で、ろう者の大人(彼らが親とは限らない)に育てられた成人、同子どもの意味である。日本では1995年にこの言葉が導入され、今ではともに「コーダ」

とされている。ちょっと考えると理想的なバイリンガルになりそうだが、二つの言語・文化のはざまにあって、それなりの問題を抱えることになるようである。

CODA のもつ問題のひとつとして、いわゆるアイコンタクトが聴者の文化とろう者の文化でもつ意味が違うことが挙げられている。ろう者の間では、真剣に話を聞こうとする時だけではなく、叱られたときにも相手の目を見る。ところが、日本の聴者の間では、たとえば叱る人の目をじっと見ているとこれを「反抗的だ」ととられる。評者は、同様の話がニューヨークの小学校であったという有名な話を思い出した。プエルトリコ系の小学生が友人の筆箱を盗んだのではないかと思われて校長先生に問われたとき、この子は下を向いていたという。校長はこれをみて嫌疑を強めたのだが、実はプエルトリコ人社会では目上の人の話を聞く時には目を合わせてはいけないというのが通念だったというのだ。ただ、聴者の日本人でも、子供を叱るときには「ちゃんとお父さんの目をみて話を聞きなさい」という人もいる。異文化コミュニケーション上の大問題である。

論考に代えて

評者は手話・手話通訳についてはほとんど何も知らない。本来なら、この本の書評を書く資格はないし、書きすすめるうちにますますそのような感じを強くした。ただ筆者は機会を得て、ここ数年、国立障害者リハビリテーションセンター学院で通訳理論の集中講義をさせていただいている。音声通訳の理論の多くが手話通訳にも通じるところがあることを確認しつつ、実は評者の方が多くを学ばせていただいている。そうしたことから、このような本があるということを紹介し、手話・手話通訳に多少とも関心をもつ人が増えることになればいささかの意味はあるのだろうと思い、本書を読んで勉強しつつ、以上を認めたものである。

そもそもわれわれ聴者は、ろう（聾）者にたいしてずいぶん無神経なことをしている。2006年に国連総会で「障害者権利条約」が採択され、手話はれっきとした独立の言語である、言語として、音声言語と同等の言語と定義されたが、人はなかなかそうは思わない。日本には日本手話を母語として学んだろう者が推定6万人いるとされる。日本手話を音声日本とは別の言語だとすれば、これにアイヌ語を含めて、日本はずっと昔から（韓国系、最近の移民のことが問題となる前から）多言語社会だったことになる。単一人種・単一言語の社会ではなかった。あえてそうやってきたとすれば、これはこのような少数者を無視し、排除してきたのが日本社会だったことになる。河原・山本編著『多言語社会がやってきた』（くろしお出版、2004）では手話についていっさい触れていない。もっともこれは同書とは趣旨がちがうから、ないものねだりかもしれない。

また、聴覚をもった者のことをわれわれは「健聴者」と言ってしまうことがある。しかしこの表現の中には、耳の聞こえる者が健康だ、正常だという判断が含まれている。本書では「聴者」ということばを使っている。ちなみに『広辞苑』（第5版*）、『大辞林』（第3版）、には「健聴者」は見出し語にあるが、「聴者」はない。辞典が実際の用法を映すものであるとすれば、これら2辞典の現状はわれわれ日本人の多く（聴者）がもっている偏見の顕れだと

* ただし第6版では「聴者」が見出し語に採用されている。

言えよう（全日本聾啞連盟による「世界ろう連盟の基礎情報」の和訳にも「健聴の子供」という表現が見られるのは、ろう者コミュニティの置かれた複雑な立場のあらわれであろうか）。

したがって、筆者の立言に異を唱えるとか批判をするということは評者のよくなしうところではない。以上の紹介に大きな間違いがないよう願うばかりである。以下、一点だけ音声通訳との関連で問題を提起し、ひとつだけ問いを記しておきたい。

評者がもっとも興味をもったのは半澤啓子さんなど、コーダの方がたの通訳である。コーダは、完全なるバイリンガルになれるので、AIIC（国際通訳者協会、ジュネーヴに本部をもつ通訳者の職業団体として世界最大もので、会員 3000 人以上を擁する）の分類によればダブル A、つまり母語をふたつもつ通訳者になれる。ところがその人たちが不遇をかこっているという（54-66 ページ）。聴者で日本手話が分かる人、聴者の通訳者の間でその通訳が評判がよくないので、自分でもいつの間にかそう思ってしまうという。ところが著者はこの人たちの日本手話への通訳をすばらしいと言う。「半澤さんの通訳だと...メッセージがそのまま頭に入り、しかも心地よい。疲れない。...半澤さんの、華麗でいて、よくわかる通訳に目を奪われていた」。ところが「半澤さんの通訳、本当にうまいね！」と言うと、その会議の世話をしていたスタッフの人たちは「あら、そう？」とそっけない（55 ページ）。著者は、この人こそモデルとなるべき手話通訳者だと思ったのに、本人が自分の手話に自信をもっていなかった。

それではいったい、コーダの人たちの通訳で著者が褒めるのはどのような通訳なのか。音声日本語への通訳 2 例が挙げられているうちから、まず最初の例を出そう。これは、学院教官 3 年目でコーダ宮澤典子さんの訳である。ともに、手話通訳者の声を文字化したものを見せてもらったものからとったものである。

- A 仲居さんが朝食を運んでいたら（廊下に）何も気付かず寝ている彼を見つけ、起こしました。彼は眼がさめ、大変驚きました。
- B 朝食の準備をしていた仲居さんに起こされ、（彼は）びっくりしました。（63 ページ）

さて、このふたつのうち、著者が手話で「聴いて」、心地よい、疲れない、華麗でいてよく分かると言うのはどちらの通訳であろうか。私はこれを見て、A はまさに「絢爛豪華型」の通訳そのものではないかと思った。この名前は、パリで通訳などを行っている黒田利朗さんの命名をそのままいただいている。つまり、言葉が洪水のようにあふれ出てきて、機関銃のように襲いかかる。これを聞くとあつけに取られる。そして、まさにこれぞ理想の通訳だと、（通訳者の卵も含めて）多くの人は思ってしまう。B はそれに対して、いわば「訥弁型」である。

著者の評価は次のようなものだ——「A は手話のメッセージを正確に理解しているものの、訳出されている日本語がくどい、あるいはまずい例」で、B には「同時通訳という条件の厳しい中、無駄がなく洗練された日本語になっているのに非常に驚いた」（63 ページ）。B の方が、著者が心地よく、疲れなく、華麗だという。何度も確かめたが、逆ではない。

ふたつ目の例は以下のようなものである。

A 「困ったね。どうしよう」と主人と相談して、主人と一緒に近所の店に行ってペンキを買うことにしました。

B それで主人とペンキを近所の店で買うことにしました。

著者は、このBが「等価な意味・メッセージ」をきちっと伝えているという(65ページ)。BではAにある情報が抜けていると見る人もいるが、これは日本手話と音声日本語の特徴からの説明で、冗長な日本語にならずに、きちっと訳出すべきものはしていると、かなり長く説明している。たとえば、手話では頻出する動詞は省けるものがかなりある。評者はこれに、音声日本語でもいちいち主語を入れる必要はまったくない点を指摘できると思う。

評者自身はこの著者の評価に全面的に賛成である。これまでは、「絢爛豪華型になるか訥弁型になるかはスタイルの違いだ」と言ってきた。著者がこのように明快に前者を弾劾しているのに力を得て、評者もこれからは、目標言語の語法・生理(中村保男氏の用語)に合った訳出が(ほとんどの場合)より優れていると言うことにしようと考えている。

さらにもう1点、注目したい。それは、「国際手話通訳者」がいるということである。「日本の手話を解しない外国のろう者は左側(国際手話通訳者)を見る」(54ページ)というのである。日本手話にしてもASLにして、これらは自然言語だから、各国で独自に発達してきた。ところが、国際手話なるものがあり、これならどこのろう者でも理解できるというのである。まるでエスペラントをだれでもが分かるというようなものではないか。この点について筆者にさらに追究していただきたいかった。筆者はその後、メルマガでこれを論じた。

最後にろう者の教育について、筆者の目を国際的なコンテキストに置いてみたい。まず、ろう者の基本的な教育は日本手話で行って、第2言語として音声日本語をまなばせるべきだという筆者の立場は、世界ろう者連盟(WFD)、ユネスコの立場でもある。さらに、国際的にもろう者の教育は大きな問題となっている。全世界のろう者およそ7000万人のうち、約80パーセントは教育を受けていないし、その土地の手話で教育をうけているのはたった1~2パーセントだとされる(障害者の権利条約より)。

書評者紹介：近藤正臣(KONDO Masaomi) 大東文化大学教授。日本通訳翻訳学会特別顧問。

連絡先：omikondo@amber.plala.or.jp
